

 書評

ブリス EV, エドモンド G 著, 桐田弘江, 石川元 訳 アスペルガー症候群への解決志向 アプローチ

利用者の自己決定を援助する

村田豊久

成人になったアスペルガー症候群の方々への心理的援助についての実際的な指南書とでもいうべき書物なのだが、その内容には驚くほど啓発的なことが多く、アスペルガー症候群についてはもとより、発達障害の精神療法について幾多の示唆を与えられる。

アスペルガー症候群は 70 年前、ハンス・アスペルガーが特異な発達のパターンを示す一群の幼児を自閉的精神病質と名付け、根気強い長期間の心理治療教育の必要性を訴えたことに由来する。アスペルガーは、この子どもたちはその潜在的能力を信じて導いてやると、大きくなって著しい変化を見せ社会的自立の可能性も生まれてくるが、どのように好転した子どもでもいくらかの自閉的性格特徴が残るのでその社会適応にはいろいろの困難がつきまとうことも同時に示唆していた。しかし、アスペルガーのこのような提唱は長い間日本のみならず外国でも正しく認識されず、カナーに次いで自閉症の垂型の記載を行った人という理解しか持たれていなかった。

本著書の訳出者である石川元氏は、数年前からアスペルガーの業績を初期のものから振り返り、アスペルガーこそは自閉症に初めて気づいた人であり、またその子どもたちの治療の必要性についての貴重な見解を述べてきていることを訴え、アスペルガーの治療教育論の中にこそ今私たちがかり火とすべき発達障害の治療理念があることを説き続けている。アスペルガーの原著に私たちが学ぶべきことが多いのは事実ではあるが、ただその対象が幼児・学童期に限られているので、青年期・成人期のアスペルガー症候群がどのような困難を抱えているのか、その心理的支援はどのような方法が適切なもので

あるかをアスペルガーの視点に立って知りたいと思ってきた。

そのような要請に応じるものとして石川元氏を選んだのが本著であったと考える。本書ではアスペルガー症候群を抱える成人期の人々の日常生活の困難ぶりがありありと描かれている。著者の 1 人は実際にアスペルガー症候群の当事者であり、主著者のブリスはそのセラピストでもあった心理療法家であり、2 人で多くのアスペルガー症候群を抱えた人々の援助に携わっている。そして、アスペルガー症候群を抱える人々に解決志向というアプローチをとったらどうしてよいのか、どのような変化が起こるのかが、興味深いエピソードを交えながら具体的に記述されている。解決志向とは問題行動や症状の原因に踏み込むのではなく、むしろそれには触れず、これからの変化に焦点をあてた暗示療法的な治療的働きかけである。これから「奇跡」が起こって今困っていることが解消するとしたら、どんな変化が起こるでしょう、それはどのようにしてあなたにはわかるでしょうかという質問が治療の進展にあわせて行われ、クライアントは支えられる。石川元氏の解説では、その点がアスペルガーの治療教育の基本とも呼応するという。楽天的治療理念で、楽観的過ぎる治療方法だという批判はあるかもしれないが、アスペルガー症候群という難しい臨床に取り組むには、「頭を空っぽにして」2 人の著者の言い分に耳を傾けてみてもよいのではと考え、一読をお勧めする。

(村田子ども教育心理相談室)

●A5 256 頁 2010 定価 2,940 円(本体 2,800 円+税) 誠信書房